

## 「道徳」の源泉としてのムハンマド (三二)

—イスラムにおける「宗教」を理解するために(その一)—

保坂 俊司

### 四、「宗教」という言葉

- (一) 宗教の語義に内存する文化的偏向について
- (二) 「宗教」という言葉の三つの源流
- (三) 仏教語としての「宗教」
- (四) 西欧語の翻訳語としての「宗教」
- (五) イデオロギーとしての「宗教」観

前回、道徳に関しては、一応の検討をおこないました。今回は、「宗教」について検討してみましよう。

現代の一般の日本人は、自らを「無宗教」と考えています。一般的な日本人は、日頃所謂宗教について真剣に考えることもないように思われます。それどころか一般的には、「宗教」を必要悪」程度にしか考えていないと思われます。このことは、NHKが実施した調査でも、現れています。「現代日本人の意識構造」(NHKブックス)など。それは「あなたは信仰(特定の宗教)を持っていますか」という問いに、日本人の六五

パーセントが「信仰を持っていない」と答えていることから推測できます。つまり宗教を信じてないと考えている人が、日本国民の五人に三人を超えて存在しているわけです。

一方アメリカで、ほぼ同じ質問をすると、九三パーセントの人が「はい」と答えるというのです。さすが、信仰の国アメリカと改めて感じさせられます。ところで、この時、私たち日本人は「宗教」という言葉に、どのような意味やイメージを懐いているのでしょうか？

辞書的な直訳では、英語の religion と「宗教」はイコールで対応します。宗教について本格的に論ずるには、先ず、「宗教」という言葉について、ある程度本質的な検討が必要です。

特に、現在のようにいわゆる宗教の相違が、国際問題などを引き起こす時代になると、一層宗教について本質的な議論がなされなければならないし、また、そのためには多面的な宗教に関する検討が不可欠です。

実は、筆者がこのように感ずるのは、特に日本人は、前出のように宗教についてまことに無関心、少なくとも殆ど知識を持っておらず、その必要性も余り感じていない人々が多数存在するということを様々な事例から見出せるからです。

その意味で日本文化は、宗教と向かい合うという文化を喪失してしまったのではないかと、と思われまふ。つまり、日本人は宗教をある意味で正しく認識する文化、あるいは伝統を喪失した、と言えると筆者は考えています。その典型が一九九五年に「地下鉄サリン事件」を引き起こしたオウム真理教への当時の日本人の反応です。ここでは多くを語れませんがその典型的な言葉を紹介します。

それは、オウム真理教の指導的な立場にいた信徒たちの多くが、東大や早稲田、慶応というような日本を代表する大学の大学院や医学部を出ていたことに対して「何で、彼らのように優秀な人が、オウムのよう

宗教に入信したのか？」というような言葉が、あちこちから聞かれたことです。

実は、この言葉の意味する宗教観こそ、現在日本人が抱える宗教観の問題を象徴的にあらわしています。その筆者の考えは、後にユックリ検討することとして、筆者が心配するのは、実は、このような日本独自の宗教観では、世界で起こっている宗教を前面に押し出した紛争、つまり二十世紀を席巻したイデオロギー対立、特に冷戦構造後の世界情勢を理解することはもちろん、自らの精神文化、つまり宗教に関して非常に特殊な、というより筆者は誤っていると思いますが、宗教観を持つている現在の日本人には、近代以前の日本の精神文化さえ、理解できないのではないかと、ということなのです。

このように書きますと大げさなことを言う、と思われるかもしれませんが、二十一世紀が宗教対立の時代といわれるように、宗教の存在感があらゆる場で、よい意味でも、悪い意味でも益々大きくなっていく現在、この現象を正確に捉えるためには、まずこれらの現象を正しく受け止められる宗教観が必要になるのではないのでしょうか。

しかし、ここで正しい「宗教」とは何か、という議論を本格的にすることは、本小論の目的を逸脱することになりますので、ここではその手がかりとして「宗教」という言葉に潜む、問題点とその形成史を簡単に紹介し、日本人とは正反対に全てが宗教と結び付けられているイスラム教理解の準備したいと思います。

#### 四、「宗教」という言葉

以下では、「宗教」という言葉について、その言葉形成の歴史をたどりながら、日本語としての「宗教」

が持つ、意味の多重構造化や、その結果生じる各種の問題点、特に我々日本人の常識として共有されている「宗教」軽視傾向の問題点を明らかにして、イスラム理解のための補助作業としていきたいと思えます。さて、「宗教」という言葉は、後に検討するように多義的な意味、特に日本独自の意味、それは日本的な意味の偏向とも言うべき意味を、日本の近代社会形成の過程で形成してきました。しかも、それはイデオロギー的、つまり政治的な背景から作られたものです。

ですから、我々が一般に用いる「宗教」という言葉は、日本的な特殊性を内包した概念を基礎としており、それを自覚せずに、イスラム教のような異文化理解に直接用いると、思いもよらぬ齟齬が生じる、と思われまます。

というのも、イスラムにおける「宗教 (Din)」と日本人が認識する「宗教」とでは、その認識に大きな差異が存在するからです。従って、両者の差異をそのまま残して、日本人がイスラムという宗教を理解しようとする、誤解や齟齬が生じる恐れが大きいというわけです。

## (二) 宗教の語義に内蔵する文化的偏向について

宗教を含めて異文化理解において、文化背景の違いから誤解や、齟齬が生じることは決して珍しいことではありません。言葉は、その典型的な存在です。しかし、日本の場合は、明治期に一気に造語・翻訳語を作り、日本語の近代化というような荒療治をして、無理矢理西洋文明に合わせた経緯があり、文化的な混乱、言葉の混乱があります。

これは日頃は余り意識されていませんが、深刻な文化的問題なのです。しかし、実はこの点、つまり「言葉の混乱」に、殆ど気付いていないということが、この問題の存在を一層深刻にしているというわけです。この点を言葉の問題から鋭く指摘されている柳文章氏は、森鷗外と巖本善治が「自然」について激しくやりあったことを引き合いにだして、つぎのように指摘されています。

「この論争は、私の見るところ、「自然」という一つのことばにかかわっている。問題は「自然」という言葉の意味なのである。この言葉に、論争者は、それぞれ正反対の意味を担わせている。論争は、要はそれに尽きる。しかし、よく調べてみると、二人は、そのことに本質的にはほとんど気づいていない、ということがわかる。すなわち、翻訳語という問題の根の深さである。この根の深さは、今日、私たちが日常使っていることばまでも、当時とほとんど変わらぬ形で及んでいる、と私は考える。」(柳文章「翻訳語成立事情」岩波新書)

偉大な知性である森鷗外にしても、自らの思想を表現する言葉の持つ限界性について十分な理解がなされていなかった、ということは大きな驚きであると同時に、この問題の根深さを十分認識させてくれる話です。もっともこの言葉の混乱を招いた責任のかなりの部分はこの鷗外にもあるわけですから、ある意味で必然ということでしょうか。

つまり近代以降の日本文化は、西欧文明を日本的に置き換えるという基本的な努力を行わず、言葉こそ日本語(漢字は、中国文字ですが)に置き換えましたが、ただその言葉の意味はヨーロッパのものをほぼそのまま直輸入し、それを強引に定着させました。その意味では、当時はやった言葉をもじれば、和魂洋才ではなく、和語洋魂であったのです。

それは、西洋文明を効率よく理解するための苦肉の策であったのですが、その一方で自己の伝統を放棄し

たということでもありました。

つまり近代の日本人は文化としての言葉が持つ最も基本的な部分、いわば文化形成の基本的な部材としての言葉の意味の伝統的な部分を切り捨て、西洋伝来の新しい意味を強引に付け加えるという極めて荒っぽいことをやってきたのです。というのも、外来語を自文化にあわせて翻訳するという行為は、極めて重要な作業ですが、コストのかかる面倒な作業であり、さらに非生産的(?)な行為で、自文化への誇りを持っていないと割にあわないものなのです。ですから近代化の過程の日本では、この作業を放棄してきた、というわけです。逆にやっかない作業をカットした分、日本はいち早く近代化という西歐化に成功できた、というわけです。その代わり、日本語の中にカタカナ語や翻訳造語が氾濫し、言葉の大混乱状態が生まれたのです。本小論で扱う「宗教」という言葉も、そのような背景があります。

何れにしても、このような問題を放置して置く事は、曖昧な言葉によって対象を分析しようとするに等しく、到底対象の正確な分析を期待することは出来ません。ですから対象、つまり、分析方法や分析対象の検討以前に、分析道具としての言葉、つまり「宗教」という言葉の各方面からの分析が必要なのです。

## (二)「宗教」という言葉の三つの源流

そこで、宗教の議論のまえに、先ず現在一般に流布している「宗教」という言葉の歴史をおさらいしましょう。現在「宗教」という言葉を説明する時は、まず英語の religion(つまりはラテン語の religio)の翻訳語として、説明されることが一般的です。しかし、我々は日本人ですから日本人の宗教観の実態に即した「宗教」という言葉の意味の理解が必要です。

そこで、中村元・川田熊太郎両博士の優れた研究等を参考にして以下、「宗教」という言葉の成立史について若干の考察をしてみましよう。

一般にいわれる宗教の語源に関する研究を整理すれば、「宗教」という言葉が持つ意味の起源には、二つの流れが考えられることとなります。

その第一は、仏教語としての用法ならびに意味であり、第二は西洋の religio or religion の訳語としてのそれです。

しかし、筆者はこれだけでは不十分だと考えています。筆者は、現在の日本人の精神を形成している言葉、ここでいう「宗教」のもつ文化的な特殊を、日本人である我々が先ず認識することで、他の地域の「宗教」との相違を修正することが出来る、と考えています。そのためには、明治以後の日本社会において「宗教」がどのように定義され、認識され、どのように機能してきたか、を検討する必要がある、と考えています。

つまり、明治・大正・昭和期において、極めて政治的・イデオロギー的に形成されたいわば和製言葉としての「宗教」という言葉の歴史の確認と、その限界性の自己認識及び修正が重要だと考えています。いわばこれが第三の意味です。

そこで、次に日本語の「宗教」のもつ三つの源流について、簡単に考察したいと思います。

## (三) 仏教語としての「宗教」

以下は中村元博士の厳密な研究をもとに、「宗教」という言葉の第一の起源である仏教語としての「宗教」

について要点を紹介します。

中村先生によれば「宗教」という語は、漢学や儒学の伝統では用いられることがなかったらしいのです。というのも「宗教」という言葉は実は仏教の専門用語つまり翻訳語であつたからです。そしてこの仏教用語の「宗教」という言葉は、次の様に合成語としてうみだされたのでした。

先ず「宗教」という言葉は、「宗」と「教」から成立しています。そして「宗」は、

「宗」のサンスクリット原語は *siddhanta* または *siddhanta-nāya* である。それは概念化 (conceptualization) を超えたものである。それは、自分が直観的に知り得るものなのである。それを鈴木大拙博士は 'realization' と訳した。

次に「教」については、

……教の原語は *desana*, *dasanā* のほかに、*śasana*, *sāsana* もよく用いられる。これらのインドの諸原語は、みな「教えること」「説示すること」という意味であるが、漢字としての、「教」は、もとは単に「教える」という意味だけではなくて、実践をも意味していたのではないかと思われる。(中村元「宗教」という訳語『日本学士院紀要』第四十六巻第二号(一九九二年二月))

です。

つまり、「宗」や「教」という伝統的な中国語の意味に、翻訳語として仏教的な新たな意味が加えられたということ。さらに、この「宗」と「教」という記号(文字)は、サンスクリット原典に説く微妙な意味の差異から中国仏教では、「宗」と「教」との対比がうまれました。

つまり漢字としての「宗」は絶対の真理、それは「不可説」あるいは「一切は実なり・言葉を超える云々」という意味を表すこととなり、また「教」は、この真理を言葉に表現して「教える」という意味となつたのです。

さらに「宗」と「教」の相違を明確にし、さらにそれを哲学的な体系の中に組み込んだのは、華嚴宗の大成者である賢首大師法蔵(六四三―七一七)であるとされます。彼は、著書『華嚴一乗教分齊宗』という書物で「六には者闍法師に依らば六宗教を立つ」と用いて、「五教十宗」の教判思想を展開しました。しかしその場合の「宗」は、もはや言葉にならない深遠な真理を意味するのではなく、現在の宗派という意味に近くなっています。ですからこれ以降「宗教」は、中村博士の指摘されるように「宗派の教義」という程の意味に用いられることになってしまいました。

しかし重要なことは、このような仏教語としての意味の変遷そのものは、今日の我々の「宗教」という言葉の直接の理解にはあまり関係していない、ということ。なぜなら、このような高度な議論は、中国にいても日本にいてもごく一部のエリートたちの間で議論されていたことであるからです。

しかし、この「宗教」が 'religion' の訳語として定着するにつれて今日の我々の語法に一段と近づいてきます。

## (四) 西欧語の翻訳語としての「宗教」

周知のように「宗教」は、*religion*の訳語でもありません。ところで「宗教」という言葉が、*religion*の訳語として初めて用いられたのは、鈴木範久氏の研究によれば、その正式な用例は「一八六八年（明治元）閏四月三日にアメリカ公使から外国事務局宛に寄せられた文書」（鈴木範久『明治宗教思潮の研究』（東大出版会、一九七九年）一六頁）です。

次に、翻訳語の「宗教」の変遷を検討するまえに、その原語である *religion* あるいは *religio* について検討しておきましょう。

*religio* に関する語源論争はつとに有名ですが、ここでは高名な言語学者エミール・バンビエスト博士の所論によって論を進めましょう。博士によれば、もともと今日我々が用いているような意味での「宗教」という言葉は、インドヨーロッパ語の用語の中には存在しなかったようです。これは或る意味で当然なことである、と同時に「宗教」の意味を知るうえで重要なことでしょう。

*religio* の語源については、二つの大きな解釈が存在します。先ず、キケロ説による *legere*（集める）説とラクタンティウスの *ligare*（結ぶ）説です。キケロの説では *religio* (*re+legere*) は、「祭祀に対して細心な、儀礼に二の足を踏む」つまり、祭儀を忠実に再現するために注意深くなり、また、その祭儀実行のための知識を集め、誤らぬように注意深く意を注ぐということです。また、「*religio*とは思いつまらざる躊躇や自制させる不安であり、云々」であり、これらも古代社会における儀礼との結びつきを考えれば極めて明確な意味をもつと考えられます。

一方ラクタンティウス説では *religio* (*re+ligio*：再び結ぶ) は、「神にそむいて神から離れた人間を再び神に結びつけたのはイエスであり云々」となるといいます。筆者には *religio* の語源として、どちらが相応しいかという議論に判断を下すことはできませんが、しかし後者の解釈がキリスト教の神学的な解釈に符合していることから、バンビエスト氏が、

(……) 神が人間を自分と結び、信仰心によって繋いだとするラクタンティウス説) これは、*religio* の意味内容そのものが変化した事による。キリスト教徒にとって、新しい信仰を異教から際立たせるものは、信仰心の絆であり、教徒の神への帰依、つまり用語本来の意味での義務であった。 *Religio* の概念は、人間自ら会との関係を打ち立てるといふ考え方に基づいて改変された。これは、古代ローマの *religio* の概念とはまったくかけ離れたもので、其の近代的語義の先駆けとなった。(エミール・バンビエスト、前田耕作監修訳『インドヨーロッパ諸制度語彙集』(言叢社、一九八七年)二五七頁)

と指摘する観点は重要でしょう。もつとも現在では、これらの解釈は正しくない、というのが一般の宗教学者の見解ですが、今は省略します。

## (五) イデオロギーとしての「宗教」観

先にも触れましたが、日本語の「宗教」という言葉自身は、近代日本においては、翻訳語にしる、仏教語にしる一般的な言葉として広く普及した言葉ではない、ということですが、実はこの言葉が一般化するのには、明治政府の政治的な意図がありました。その結果として今日の漠然とした「宗教」観が形成されたのです。

そして、この過程を検討することで、日本文化に内在する「宗教」観の矛盾の原因の一端を知ることが出来ます。

さて、現在の「宗教」という「言葉」が、前出の religion に辞書的に対応するという事を確定する役割を果たしたのは、井上哲次郎でした。彼は明治十四年発行『哲学字彙』において、religion に学術的な立場から「宗教」を当て嵌めた人です。

しかし、この学術用語としての「宗教」の意味以上に、重要なイデオロギー的な「宗教」の意味を形成したのは、実は明治政府の宗教政策に負う所が大きいのです。

というのも、半ば革命的な手法で政権を奪取した明治政権の正当性は、日本の民族宗教としての神道を全面的に打ち出した平田神道を中心としたイデオロギーを基礎としていました。しかし、その基盤は決して磐石ではありませんでした。

そこで、明治政府はその正当性を強調し、政権を磐石とするために実質的な神道の国教化政策を取りました。

しかし、発足当初のように神道を優遇し、仏教やキリスト教を禁止するというような乱暴な政策が、ヨーロッパの圧力で、一転して宗教自由の原則が強要されることとなりました。ところが、明治政府はキリスト教の国民一般への浸透の防止、あるいは圧倒的な強さをもって押し寄せてくる近代ヨーロッパ文化への民族的な危機意識から、神道が中心の国家体制（国体）は譲れないとして、神道優遇策を維持するために、神道非宗教論というのを提唱したのです。

それは、福沢諭吉など当時の知識階級の以下のような言葉によって裏付けられました。

余輩は、神仏の事に付き甚だ不案内なれども、識者の言を聞けば、神道は決して宗教に非すと云へり。また古来の習慣においても、仏者は三世の因果を主義に立て、未来の禍福を説き、専ら死者の為の如くなれども、神道は唯現雅に在って、過去の神霊を祭り、その徳に報じて現世の人の幸福を祈り、専ら生者の為にするのみなれば、決して宗教には非ざるが如し。……中略……今より（明治十四年頃）更に神仏の区別して、日本の宗教は仏法なり、神道は宗教にあらず。（福沢諭吉「時々小語」）

あるいは

……彼ノ神道ナル者ハ実ニ宗教ト称ス可キモノニ非ズト、……我輩ハ神道ナル者ノ決シテ宗教ニ非ズ、（墨雲）ゴータマ・基督ノ教法ト並立ス可カラズ、強テ之ヲ宗教ト看做スモ、其ノ經典ノ教旨ヲ説キタル者無ク、其ノ無形ノ人心ヲ管制シテ信仰セシム可キ者ニ乏シク、其ノ体裁ハ全ク王室ニ附屬シテ宗廟ノ祭祀ニ奉ズルニ適當ナル者ト断案スルヤ久シ。……（「宗教と国家」、八一頁）

これらは極めて強い民族意識、つまり、神道と国家意識が一体化した「宗教」解釈です。この思想が、国民一体となって徹底的に普及されます。特にこの「神道非宗教論」とも云うべき立場が、「国民教育」という教育政策を通して、初等・中等教育の中に組み込まれました。そしてこのことは、「宗教」という言葉の概念を著しく複雑なというより歪んだものとしてしまったのです。

つまり、神道を「宗教」ではないとしたために、「宗教」という言葉が本来含むべき要素が、その言葉から切り離されたのです。それは、以下のような当時の「宗教」観をみれば明らかです。

たえば、

宗教は俗人の哲学、哲学は学者の宗教、俗人の絶えざる間は宗教も迹を絶たざるべく、殊に高尚なる哲学科学等を解する能はざるもの及び婦女子等に取りては耶蘇教は其効なきにあらず、然れども耶蘇教は智識の開發に従ひて其勢力を失ふことは復た疑なきなり、殊に哲学盛なれば、宗教衰へ、宗教盛なれば、哲学衰ふこと古今同一轍に出づるが如し。

あるいは、

人の幼稚なるや、自主独立の力なくして専ら父母若くは他の長老に依りて生長するを得、智識上に於ても亦此の如く、脳力の孱弱なるものは、偏に他力を頼み、却て自力の他力に勝ることを知らざるなり、宗教的信仰を脱却すること能はざるものは、児童の未だ母乳を廃すること能はざる薬が如く其自埒の不足を表白するものなり。(井上哲次郎「我が国体と国民道徳」、四一頁)

という意見が、当時において教育されました。

ここには、「宗教」は、幼稚で、未熟半人前の人間の信ずる対象、あるいは知性によってやがて乗り越えられる意見が、当時において教育されました。事実、井上は、「所がどうしても成立宗教(仏教・キリスト教)として説きますといふと迷信が付随してくる」として、神道以外の「宗教」には、迷信や自己の立場に固執する見解が多く「国民教育」にとつて有害である、としてこれを排除しようしました。ただし、神道は宗教ではないので迷信も不合理も存在しないという立場でした。

ここでいう国民教育とは、「次の時代の国民を健全に養成しよう」と云ふ目的を有す」という国家目標のためになされたものです。この道徳教育という名の神道非宗教論は、神道によって支えられた国家を絶対とする倫理教育のことです。(因みにこれが、山本七平が日本教と呼んだものです。) 残念ながら一般の日本人には、このあたりの経緯が理解されず、しかも、この極めてイデオロギー的な宗教観が、日本文化にもたらした不幸を真剣に意識していません。

そして、神国日本というような視点から、突き進んだ大東亜戦争(第二次世界大戦)の敗北により、明治的な神道至上主義社会は終焉します。この時、日本人は神道非宗教論の後ろ盾を失います。そして、一挙に宗教への不信が生まれます。それは戦前の国家主義、神道主義国家への反省であったのですが、その後には連合軍の政策もあつたようです。

その結果、日本人には「宗教」は、「必要悪」や「半人前の人間の頼るもの」という戦前の教育の成果のみが残り、その宗教観が、今日まで引き継がれている、というわけです。冒頭に挙げた「何で、なんで優秀な人たちがオウムなんて宗教にはいったのか」という嘆息が、人々の間から多く聞かれたのは、このような背景があつたということです。ですからこのような状態で「宗教」を論ずると、当然イスラムという宗教を正しく理解することは出来ません。



そこでやや迂遠とも思われますが、先ず「宗教」という言葉の意味を考えました。次回は、イスラムの宗教について論じて参りましょう。(以下次号)